

生殖補助医療によって 生まれた子どもの長期予後

東京医科大学産科婦人科

久慈 直昭, 伊東 宏絵, 井坂 恵一

KEY WORDS

- 生殖補助医療
- 予後
- 先天異常

はじめに

生殖補助医療(assisted reproductive technology ; ART)による出生はわが国全出生数の3%以上となり、今後も増え続ける可能性がある。増加したART出生児が、健康に生まれてくるのか、また出生後にどのように育っていくかについては、わが国ばかりでなく世界中で関心もたれている。

これまで、ART出生児は自然妊娠児に比べて出生体重や周産期予後、先天異常や長期予後においてさまざまな変化があることがほぼ確認されているが¹⁾、その原因が両親の遺伝的影響であるのか、あるいはART技術そのものに由来するのか、が現在の議論の中心となっている²⁾。もしART出生児で見られる児の予後の微少な変化が(不妊と関連した)両親の因子によるものであれば、不妊でない全く健康な女性がこの技術を用いても、児の予後に影響しないはずであるし、もしART技

術そのものによるものであれば、不妊でない女性がこの技術を使用することによって、わずかではあるが児の予後を医原性に変化させてしまうことになる。さらに、後者であればART技術の改良によって、この影響を小さくする可能性も出てくる。

そこで本稿では、現在までに報告されているARTの出生児への影響を、特に出生後の発育・発達を中心に概説し、あわせてわれわれが行っているわが国のART出生児予後調査の現在までの解析結果を紹介する。

I. ART出生児の身体発育

1. 出生体重

ARTによる出生児への影響が調べ始められた当初、ART由来妊娠では早産や低出生体重児の割合が、自然妊娠に比べ多いと考えられていた。この原因はそのころ多かった多胎妊娠と、それに由来する早産であると考えられ

Long-term prognosis of
ART children.

Naoaki Kuji(教授)

Hiroe Ito(講師)

Keiichi Isaka(教授)

SAMPLE